



2011 年 12月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 38

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 30 (聞き手 高橋素子)

高橋 > この十月から、毎週木曜日、午後六時より会長の「五七五の笑い」が、電波に乗って全国に配信されていますね。私も携帯で南海放送ラジオ「笑える五七五」の番組を聞かせて戴いています。懐メロを取り入れたムードのある和やかな雰囲気の中で
の笑い、会長の多才の芸は本当に面白くて……。きっと評判もいいのでしょうね。

会長 > 多才多芸は、ほめ言葉です。私の場合は器用貧乏。放送している当人としては、
楽しくて仕方ないというのも事実です。南海放送ラジオでは、五七五のおかしさを追
求する事をテーマにしています。電話でお聴き下さる場合には 089-946-0099
にダイヤルしてみてください。毎週木曜日、午後六時から三十分の放送です。

高橋 > それでは、本題に入らせて戴きますね。本日は、秋の動物の部、季語は「雀為蛤」
です。中国の古い言い伝えを基に、七十二候・十月九日頃を表す、寒露に登場する
言葉ですね。

蛤になりし舌切雀かな 春鴻

鳥さしの蛤うりになりもせで 子規

稲雀案山子に射られ海に入る 子規

雀蛤になり藤太龍宮より帰る 子規

三句目の「藤太」は、田原藤太のことで、俵藤太とも書かれます。龍王の命で滋
賀の三上山を七巻き半するほどの大百足を退治したと言われ、私の住む近江では

有名な伝説上の人物です。

会長 > まずは、「蛤になりし舌切雀・・・」の句からまいりましょう。

「雀為蛤(すずめ、はまぐりとなる)」、

秋の季語ですね。俳句が持つ可笑しさの一つに、奇想天外な季語があります。これもその一つ。子規は蛤と雀の句をたくさん詠んでいます。ちなみに蛤の字は二枚貝を意味していますね。語源としては「浜の栗」です。この句の可笑しさは、「饒舌」の雀が舌を切られ「寡黙の蛤」になってしまった。お喋りを戒めたとも受けとれますね。

「鳥さしの蛤うりに・・・」、

竹ざおの先に鳥餅をつけて小鳥を捕まえて、鷹狩りの餌としたのですが、この句の「鳥さし」は、そうして捕まえて売る人のことです。この句は「雀化して蛤となる」のだから蛤売りになればよいものを、というほどの意味でしょう。

「稻雀案山子に射られ・・・」、

子規はなんと想像力豊かな人だったかと思います。雀化して蛤となってしまった。それは案山子に射られたからだということです。

「雀蛤になり藤太・・・」、

毀誉褒貶は世のならい。龍宮に遊んで夢のような日々を過ごした藤太も、戻るときには蛤のように押し黙って、かつての雀時代の華やかさは微塵もないということでしょうか。

高橋 > 「雀為蛤」の滑稽句、まだまだ続きますよ。

どの雀あす蛤になるやらん 鳴雪

蛤のどこが雀の眼玉やら 穆堂

あて事の蛤になりし雀かな 紅緑

三皇五帝雀蛤となりけり 瀾水

三皇五帝とは、神話時代、中国を治めたとされる伝説上の八人の帝王たちの総称。後の世まで理想的な支配者として尊ばれたそうです。

会長 > 「どの雀あす蛤になる・・・」、

目の前にいる雀たちの、どれかは化して蛤になるだろうと思ったのですね。蛤になるとしたら、どの雀だろうということ。

「蛤のどこが雀の・・・」、

蛤になった雀のどこが目玉かと首をかしげています。素直な句です。

「あて事の蛤になりし・・・」、

さきほどの鳴雪の句と同じく、雀が蛤になるという「あてごと」を句にしています。

「三皇五帝雀蛤と・・・」、

いつの世にも古き良き時代を懐かしむもので、句では三皇五帝の時代は良かったということを、雀が蛤になったことになぞらえています。雀のにぎやかさから蛤のように寡黙の沈滞時代になってしまったということですね。

高橋 > 成る程、面白いお話ありがとうございます。「雀為蛤」は、本当に珍しい季語。蛤は雀の化身という事ですね。そう言えば雀と蛤の模様も似ていますね。それでは、次に参ります。季語は「蜻蛉」です。

蜻蛉の顔は大きな目玉かな 知足

釣り下手の竿に来て寝るとんぼかな 也有

お祭りに赤いでたちの蜻蛉かな 一茶

とんぼうや日本に似たる顔もせず 大江丸

番兵にとまらんとするとんぼ哉 子規

蜻蛉になぶられて馬の長き顔 虚子

蜻蛉の眼玉油断もあらぬかな 白水

「滑稽句も一般の俳句同様、写生して作る。そして見たままを非科学的に断定して詠む。でもその思い込みは読者が納得する表現でなければならない」とは、会長のお言葉ですが、

とんぼうの空中給油してをりぬ 健

雌雄の蜻蛉が空中で結ばれている様子は、確かに空中給油している様に見えますね。

会長 > 「蜻蛉の顔は大きな・・・」、

たしかに顔の一部に目玉があるというのが大方の昆虫です。トンボに限っては、目ん玉の一部に顔があるという感じですね。ですから「トンボの顔は目ん玉か」とおどけて言っているのです。

「釣り下手の竿に・・・」、

釣りが下手な人は魚の食いがしないからいつまでもじっとしている。それゆえにトンボが止まり易い。ただとまるだけでなくそのトンボが寝てしまう。それほどじっとして動かない釣り竿なのです。

「お祭りに赤いでたち・・・」、

祭りは装束に赤をあしらって派手なものが多いですね。それに合わせたように赤トンボの登場なのでしょう。

「とんぼうや日本に・・・」、

とんぼは目ん玉が大きくてどうしても異国のイメージですね。長く住みついて、もはや帰化しているのだろうに、まだ異国的な顔だと言っているのです。

「番兵にとまらんと・・・」、

番兵は常に不動直立の姿勢ですから蜻蛉も警戒心を解いているのでしょう。

「蜻蛉になぶられて・・・」、

かつてはトンボや馬は身近な存在でしたから、こんな観察ができたのですね。トンボが馬の顔に頻繁にとまるから馬の顔が長くなったと、顔の長い理由としているのです。

「蜻蛉の眼玉油断・・・」、

トンボは警戒心の強い昆虫です。また常に獲物をねらって目ん玉を動かしますから、まさに油断のない顔ですね。

高橋 > 次の季語は、「蠅螂」、かまきりです。会長にも面白い句がおありですね。

蠅螂や斧の素振りを怠らず 健

かまきりの雌を争ふ刃傷沙汰 健

それでは、百九年前の句に参ります。

蠅螂のほむらは胸に赤きかな 史邦

蠅螂の戈を枕に眠るかな 露月

蠅螂の疳癢起す野分かな 愚哉

蠅螂の怒らでも事はすむ世なり 竹の門

ご解説よろしくお願いいたします。

会長 > 私の、「螳螂や斧の素振り…」は、写生句です。常に身構えて戦闘態勢のカマキリは、斧の素振りをしています。その勤勉を称えたのです。

次の私の「かまきりの雌を争ふ…」の句は、人間も一人の女性を巡って男が争うことがあります。カマキリは凶器を手をしているから、刃傷沙汰というわけですね。この句は「刃傷沙汰」という表現に、可笑しさがあります。

「螳螂のほむらは胸に…」、

作者は、カマキリの胸の赤い色をカマキリの情熱と見たのでしょう。「ほむら」は炎のように燃える思いのことです。

「螳螂の戈を枕に…」、

カマキリは眠るときに矛を枕に眠るということですね。実際には胸に畳んで眠るのですが、枕は大切にするという意味なのでしょう。

「螳螂の疝癪起す…」の句、

野分は台風のことですね。かまきりにとって許し難い暴挙と言うことです。おそらくは疝癪を起こすだろうと。カマキリの身になって作った句です。擬人化ですね。

「螳螂の怒らでも事…」、

常に喧嘩腰のカマキリを題材にして、平穏な世を歌っているのです。あのカマキリでさえ戦闘態勢をとらぬほどであると…。

高橋 > 螳螂も喜ぶ様なご解説、有難うございます。次の季語は、「蝨」「蓑虫」です。一句ずつありますよ。

そこらぢういひ合せてや飛蝨 乙二

蓑虫のあまりちいさき心かな 春鴻

会長 > 「そこらどういひ合せて…」、
稲田で稲を食い荒らす蠱は、人が近づくと驚いて次々飛び出します。それが「申し合せて」飛び出すのかと問うているのです。

「蓑虫のあまりちいさき…」、
蓑虫の蓑は一戸建てですが、常に閉じこもっていますね。それが小さな心というのでしょう。こんなものでも擬人化して人間と比較するのが可笑しいですね。

高橋 > 楽しく学習させて戴いているうちに、お時間となってしまいました。先日、会長がおっしゃいました様に、この紅緑の句集がいつか私達の血となり肉となることを願いながら…、本日の季語をお使いになつての浪曲調のひと節、お願いしたいと思います。

会長 > ♪酒を飲むうなとお睨んで叱る 次郎長親分みたいな するうどい目つきの鬼ヤンマ 痩せても枯れても任侠ひとすじいいいいい カマキリみたいなああああ凶器をかざしをれども 来世は蓑に籠るやも知れずうううう ちょうど時間となりました ♪